

国際都市アントウェルペンと〈歌の本〉

—異端の印刷業者ルーランスとスザート—

前野 みち子

〈序〉

1855年、ハノーファーで『1544年のアントウェルペンの歌の本』*Antwerpener Liederbuch vom Jahre 1544*と題するフラマン語（オランダ語）の世俗歌集が出版された。ニーダーザクセンのヴォルフエンビュッテル図書館に保存されていた16世紀の刊本『美しい歌の本』*Een schoon liedekensboeck*の翻刻本である。¹⁾原本の出版地はタイトルが示すように当時ヨーロッパ随一の商業金融都市として



図版1：ヴォルフエンビュッテル図書館に所蔵される『美しい歌の本』（1544年）のタイトル頁と扉絵。

知られたアントウェルペン、出版人はこの歌集の扉頁（図1参照）右下に記されているヤン・ルーランスだった。彼は1537年に同市の市民権を獲得している。²⁾ 実用的ハンドブックと宗教書を主な出版領域としたルーランスが〈歌の本〉をも手がけたのは、それがもたらすはずのかなりの収益を当て込んでのことだったに違いない。この歌集はそこに含まれる歌の配列と数、時事的・政治的な歌の内容などから原本の二度目の増補版と見られ、採録された歌の数は最初の173から、次の版で210、そしてここで問題にする第三版では221に増えている。原本の出版人もルーランスであったとすれば（これは現在のところ確定する資料がない）、彼がアントウェルペンの市民権を得た1537年以降、おそらくは1542年前後に出たと推測されている。そして、ルーランスによる出版が確実な後者二つの増補版のうち、後の版の出版年が奥付に1544年とあるので、かなり早いペースで版を重ねたことが分かる。³⁾つまり、この歌集は見込み通りよく売れたのである。

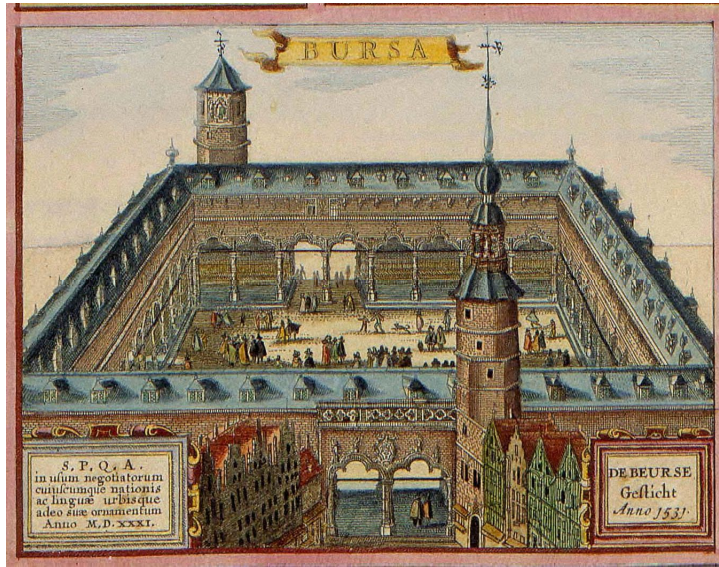
それにもかかわらず、現在まで完全な形で残されている1544年の刊本は、ヴォルフエンビュッテル図書館所蔵の一冊のみで、それ以前の二つの版については現存しない。当時広く出回った一枚刷り印刷物やパンフレット（小冊子）ならば、日用品的消費財として、時を経るうちに反古にされ捨てられて後世にまったく形を残さないことも容易に想像できる。逆にたとえば、アントウェルペンを、いや16世紀全体を代表する出版人クリストフ・プランタンが印刷したような王侯貴族や富裕階層向けの出版物ならば、450年以上も前に出されたものでも今日まで生き延びる可能性は高い。職人親方や商人などの中産市民が購買層と推測される『美しい歌の本』はこのちょうど中間あたりに位置するが、当時の若者たちの歌唱熱や世俗歌が歌われる場（居酒屋や大道・広場など）を考慮に入れるならば、たった一冊とはいえ完全な形で現存すること自体にやはり偶然の悪戯を喜ぶべきかもしれない。しかしそれにしても、フラマン語の歌ばかりを収めた世俗歌集が、その言葉を話す人々の暮らすかつての人口稠密な大都市アントウェルペンやネーデルラントの周辺諸都市には一冊も残らず、低地ドイツ地方の小都市ヴォルフエンビュッテルの図書館に十九世紀半ばまでひっそりと眠っていたという事実は一体何を意味するのだろうか。

1. 商業都市アントウェルペンの繁栄

当時のアントウェルペンは周辺の村々から、ブラバントや同じ低地地方のあ

らゆる都市から、そして他のヨーロッパ中の国々から、押し寄せ移り住む無数の人々の群れを貪欲に吸収しつつ、急速な勢いで拡大し続けていた。1480年に3万3千を数えたその人口は、1526年には5万5千、そしてそのほぼ40年後の1565年には10万のピークに達している。⁴⁾1541年にフィレンツェからリヨンを経てアントウェルペンに移り住んだ商人にして著述家ロドヴィーコ・グイッチャルディーニ⁵⁾は、低地地方についてのよく知られた著作のなかで、この町を「都市の女王」と呼んでその類を見ない富と繁栄を称賛した。⁶⁾この呼称は、古代から近世初期まで一貫してヨーロッパの商業と交易を主導してきた地中海地域出身の人物が寄せた最大級の賛辞として、当時のアントウェルペンの特異な隆盛ぶりを物語るとともに、ヨーロッパ経済の中心が南から北へと着実に移行しつつあったことを証してもいる。近隣の国々と遠隔地から運ばれてくる毛織物、香辛料、金属（とくに銅と銀）などの商品は、この都市に一旦集められた後、再びヨーロッパ各地に輸送され散っていった。水路にも陸路にも恵まれたこの遠隔地・中継貿易の拠点にはイギリス、ドイツ、ポルトガル、イタリア、スペインの商人たちを強く惹きつけた。仕事を求めてこの都市に流れ込む職人たちの多くは、集められた商品を加工して付加価値を付ける第二次産業に従事し、手に職をもたない人々は既に高度に組織化されていた運送業の末端の担い手ともなった。そしてこのような物流を支えその更なる発展を促したのは、すでにヴェネチアの銀行・為替取引から多くを学んでいたこの町の国際金融システムだった。⁷⁾

市内には、十五世紀からスヘルデ河岸の船着き場附近にあったイギリスとハンザの商館（商品展示館）に加えて、十六世紀初めからジェノヴァ（1501）、ポルトガル（1511）、そして南ドイツを代表するフッガー家（1525）の豪壮な商館が次々と建てられ⁸⁾、その下で、あるいはその関連領域で働く多くの外国人は国ごとに一定の居住区をもっていた。諸外国との商業の便宜を図るために1515年に建造された商品取引所（両替所）は、僅か20年も経たない1531年にはもう別の通りに落成した後期ゴシック様式の回廊をもつ新商品取引所（*nieuwe beurse*, 両替所）に取って代わられた。アントウェルペンの活況のシンボルとして商業神メルクリウスの神殿のような壮麗さを誇ったこの建物は、当時この都市を訪れた旅行者がまず最初に詣でる場所だったという。⁹⁾



図版2：新両替所。1624年に出版されたアントウェルペン市地図の周囲に都市名所の一つとして描かれている。

2. アントウェルペンの印刷・出版業

アントウェルペンの印刷・出版業は、全ヨーロッパを巻き込むこのような商品集散地（entrepôt）のネットワークを生かして、16世紀に急速に国際化した産業分野だった。15世紀半ばにマインツで誕生した新印刷術は世紀末までにヨーロッパ各地に広まり、すでにアントウェルペンにも及んでいたが、16世紀初頭からはこの都市の商業中心政策が効を奏して、全ヨーロッパを相手に利潤追求をめざす新時代の企業家印刷業者たちが次々この町にやってきた。¹⁰⁾そしてここで提供される潤沢な商業資本を生かし、この産業を一挙に国際化したのである。あるデータによれば、1501年から1510年の間に45名を数えたアントウェルペンの印刷業者は1570年代にはその十倍に膨れあがった。¹¹⁾別のデータによれば、1500年から1540年までの成長期にネーデルラントで開業していた133名の印刷業者のうち約半分がアントウェルペンに居住し、この地方で当時刊行された約4000点の書籍のうち半数を超える2254点がこの都市で出版されたものだったという。¹²⁾ルーランズがアントウェルペンに移り住んだのはまさしくこの頃であり、この都市の印刷・出版業の華々しい隆盛に惹かれてのことだったに違いない。¹³⁾

アントウェルペンにおいても、15世紀末までに印刷された書籍の主流は、地

元の富裕層に向けたフラマン語とフランス語による信仰書や騎士道物語^{ロマンス}などだった。しかし、経営チャンスに敏感なこの町の印刷業者たちは、取り扱う分野を見る見るうちに多角化し手広い商いを始めるようになる。中産層までを射程に収めた定番の信仰書や教化書から、大航海時代にふさわしい地理書・旅行物語・旅行日誌、学校用教科書、教会の典礼書や都市の行政文書、行商用民衆本小冊子、そしてこの類とも一部は購買層が重なる〈歌の本〉までを、一人の業者が一手に引き受けることも稀ではなかった。そしてこの都市の国際的ネットワークと豊かな資本が、これら多岐にわたる書籍の流通と販路拡大に拍車をかけ、輸出先の言語に合わせた出版という限りなく大きな国際市場の開拓に導いたのである。

まずイギリスとの緊密な商取引関係（毛織物が中心）を背景に、15世紀末から輸出用の英語の書籍の印刷に携わる業者が現れると、アントウェルペンの同業者は次々とこの流れに加わった。¹⁴イギリスでは周知のように1476年にW・カクストンが最初の印刷所を開設したが、その後の自力での発展が遅々としたものであったため、テューダー王朝は「書籍の輸入・製造・販売」に関わる外国人に対し、1484年に制定した外国人商人の営業を規制する法律の諸規定を免除する格別の優遇措置をとった。イギリス在住の外国人印刷業者と外国の印刷業にとって至極好都合であったこの状況は、その後国内の業者が次第に成長したこと、国王ヘンリー八世が離婚問題を契機に宗教改革を押し進め外国との接触を忌避する必要が生じたことなどによって急転回する。1533年に制定された「印刷業者および製本業者に関する法律」は、この業種におけるそれまでの外国人優遇措置を撤廃し厳しい営業制限を設けた。¹⁵しかしこの政策転換はアントウェルペンの印刷業者にさしたる打撃を与えなかった。彼らはもともと自分の都市で印刷した書籍を輸出することに主眼を置いており、後述するように、すでに20年代から宗教改革派の異端書の印刷と密輸に大きな販路を獲得していたからである。

イギリスよりもさらに印刷業の発展が遅れたスペインにも、アントウェルペンの書籍は大量に流れ込んだ。1519年、ネーデルラントの支配者はハプスブルク家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世からその孫のカール五世（在位1519-56）に移るが、カールはスペイン王位（カルロス一世、在位1516-56）をも兼ねることによって、後にこの地方がスペインの強圧的支配への反動から独立運動を起こすに至る政治的展開の種子を用意した。しかし、スペインとの経済的

結びつきはそれ以前から存在した。前世紀末までブリュッヘを拠点に活動していたスペイン商人は、マクシミリアン一世のアントウェルペン優遇策を受けて16世紀初頭からこの都市に移り始め、世紀半ばまでにその本拠地を完全に移し替えることになる。ここで印刷された書物が16世紀を通じてスペインに出回ったのは、このような政治的・経済的背景によるものだった。¹⁶⁾

3. 宗教改革運動の時代

1520年代になると、アントウェルペンの印刷業には思いがけない方向から新しく広大な国際市場が開けた。ルターによる宗教改革運動がドイツから隣接各国に野火のように燃え広がり、ルター派の教義を喧伝する書籍、旧教を糾弾するパンフレット、ルターのドイツ語訳聖書を皮切りとする各国の俗語（民衆語）訳聖書など、新教と関わる印刷物の需要が北ヨーロッパを中心として爆発的に高まったからである。当初、商業的観点から異端に寛容な政策をとったアントウェルペンでは、印刷業者たちが周辺の国々では印刷の叶わぬ出版物を一手に請け負って莫大な収益を上げた。しかしこの新教書籍の出版天国は長くは続かなかった。1524年、カトリック信仰を堅持する神聖ローマ帝国の圧力に押された都市権力が禁書の印刷に関する検閲を強化し、すべての書籍に著者、印刷者と印刷人刻印、印刷年、印刷地の記載を義務づけたからである。それでも印刷業者たちは匿名・偽名・出版地と出版年の詐称など、ありとあらゆる手段を考え出してこれら危険思想の伝達媒体を全ヨーロッパに輸出し続けた。¹⁷⁾これに対してネーデルラン総督府は更に厳しい姿勢で臨み、1529年には主にルター派に狙いを定めた初めての禁書目録を作成し、禁書の印刷を死罪と定めた。とはいえ、ヨーロッパ中に異端審問の嵐が吹き荒れ、多くの印刷業者がその身を死の危険に曝していた時代（例えばフランス国王フランソワ一世による新教弾圧事件として名高い1534年の檄文事件では多くの人文主義者や印刷業者が処刑されただけでなく、全面的な出版禁止令の発令に至っている）であり、他国の都市と比較してネーデルラント諸都市の、そしてとりわけアントウェルペン市の異端に対する罰則規定は決して苛酷であったとは言えない。1525年からスペインの支配下に入る1566年までの間にこの都市で宗教上の理由から死刑に処せられた者は161名いたが、その大多数がカトリックはもちろんプロテスタントからも異端視され排斥された再洗礼派の人々で、ルター派の犠牲者は僅か5名にすぎなかった。ここに含まれていた二人の筋金入りのルター派印刷業者はともに繰り返し警告

を受けたり市外追放を宣告されたりした後で、1542年と1545年に処刑されている。¹⁸⁾

ルター派の印刷物を手掛けたアントウェルペンの多くの業者は、しばしば同時に、カトリック都市の印刷人として各国語のルター攻撃文書、正統派神学の書、ローマ教皇の教書・勅書をも並行して印刷するという両面作戦をとった。そこには弾圧する当局の嫌疑をかわすという理由もなくはなかったが、個々の信仰上の立場はともかく、印刷業を生業として選んだ人々が自身の商業目的をひたすら追求する姿があった。彼らは何語であれ、どこの国に向けてであれ、購買者あるいは庇護者^{パトロナージュ}が見込めるものを印刷した。また、羽振りの良い印刷業者が同業者に仕事を下請けに出したり、あるいは外国や他都市の同業者と提携し販路を確保した上で大量の仕事を請け負ったり、分業によって生産性を上げたりするなど、この都市の他の産業で発達した利潤追求のためのノウハウが印刷・出版業にも巧みに応用されていた。アントウェルペンから輸出される書籍が他の都市にも増してとりわけ多言語^{ポリュグロット}であったのは、書籍の流通経路がこの商業都市に集う人々の経済ネットワークをそのまま反映していたからである。外国からやって来る商人たちは、「アントウェルペンの商人たちとその妻たちが三カ国語か四カ国語を操り、時には五カ国語から七カ国語も話す」ことに驚嘆した。「妻たち」までも含むこの多言語^{ポリュグロット}は、もちろん商業的実用をめざして訓練されたものであり、実際数カ国語を対照させた実用表現集・辞書類の出版もすでにこの頃から盛んだった。そしてこの多言語社会は、16世紀後半に最も成功した印刷業者、クリストフ・プランタンによって古典語にまで敷衍され、多言語訳聖書（Biblia polyglotta、ラテン語・ギリシア語・ヘブライ語・古代シリア語・アラム語の対訳）という学術上、そして出版史上、画期的な書物の編纂・出版を可能にしたのである。¹⁹⁾

4. 楽譜印刷の興隆

アントウェルペンの印刷業者にはルーランスのように近郊から移住してくるネーデルラント人だけでなく、多くの外国人も交じっていた。²⁰⁾その筆頭にはもちろん1555年に印刷工房を開いた上述のフランス人プランタンを挙げなければならないが、<歌の本>との関連でいえば、むしろネーデルラント地域で最初に最も大きな成功を収めた楽譜印刷業者、ティールマン・スザートの存在が重要である。スザートはドイツ人で、プランタンより早く、1543年からアント

ウェルペンで印刷業を始めている。²¹⁾彼の印刷工房（スザート工房は図版2の新両替所に通じる短いトヴァールスマーデン通り——図の手前に見えている——にあった）は楽譜付歌曲集を専門に手掛けたが、このような音楽に特化した印刷業の成立とその成功は、中産市民層における音楽趣味の普及を物語るものだった。前世紀後半からこの地方の富裕市民層に浸透し始めた音楽趣味は、16世紀に入ると中産市民層まで巻き込んで急速に、かつ幅広く共有されるようになっていた。同時にまた、他の商品同様、印刷楽譜をこの都市から全ヨーロッパに向けて輸出する国際市場も既に大きく開けていたのである。

それまでの楽譜は主に愛好家の間での手写や写譜を職業とする人々によって制作されていた。楽譜を印刷に付そうとする努力は既に15世紀末から開始され、16世紀初頭のイタリアでその技術改良が一定の成果を挙げた。しかしここではまだ刷り上がるのに二、三度の工程を必要としたため、コストが嵩むという難点があった。²²⁾その後、この工程を普通の書籍と同様一度に短縮することが可能になり、1528年にパリに工房を構えたピエール・アテナンがこの方法で美しい印刷楽譜を出版するやたちまち評判をとった（図版3を参照）。彼は王室に



図版3：アテナン工房の印刷楽譜『27の新しいシャンソン集第2巻』*Second livre contenant XXVII chansons nouvelles*の1頁、パリ、1538

取り入って翌年フランソワ一世から楽譜出版・販売の独占権を獲得し、宮廷人だけでなく音楽愛好家の市民たちにも購買層を広げた。²³⁾アテナンが印刷した楽譜は主として宗教音楽曲集と世俗歌曲集（その多くは3声か4声のシャンソン曲集）に分れるが、さらにこれらのシャンソン曲集を当時非常に人気のあったリュートの独奏用あるいはリュート伴奏付きに編曲したり、舞曲と組み合わせたりするなど、時代の好尚に合わせた巧みなアイデアによって工房の名声を

ますます高めた。彼はまた、新味のある、あるいはパリではまだ知られていないシャンソンを求めて、フランスやフランドルの宮廷音楽から市井の流行歌まで、様々の社会階層のシャンソンを次々と曲集に採り入れた。その結果生じた階級混濁的なシャンソン曲集は、宮廷人や貴族に憧れる市民階層の上昇志向を大いに満足させるとともに、洗練に倦んで粗野で新奇なものを求め始めた宮廷人の趣味にも合致するものだった。こうしてアテナニヤンの楽譜はヨーロッパ中に広まることになったのである。²⁴⁾

アントウェルペンの初期の楽譜印刷業者スザートは、アテナニヤンの楽譜印刷と購買層の意向を先取りする巧みな商法を確実に意識していたように見える。彼は宗教曲集も数多く手掛けているが、その本領はフランス語のシャンソン集（フランス語は15世紀にネーデルラントを支配したブルゴーニュ宮廷の言葉であり、16世紀にブリュッセルに置かれていたネーデルラント総督ハンガリーのマリア²⁵⁾の



図版3：スザートが最初に印刷した『26のシャンソン集』*Vingt et six chansons*の木版挿絵（ベルリン国立図書館音楽部門所蔵）。中央の玉座にすわるのがマリアで、周囲を廷臣、合唱隊の少年、男声歌手などが取り囲んでいる。左端手前の人物がおそらくスザート自身だろう。マリアの横の譜面台に彼の印刷したパートブックが見える。

宮廷の言葉でもあった）にあり、そこに自身で作曲したものも収めている。パリのアテナニヤンが王室や宮廷人と結びついて事業を拡大したのに対して、アントウェルペンのスザートは楽譜の印刷という新しい事業を始めるに当たってマリアの宮廷の庇護を求めるだけでなく、都市からの補助金を獲得している。²⁶⁾つまり1542～43年の時点で、この繁栄する商業都市の支配層は楽譜印刷を将来性のある事業と考えたのである。15世紀にはまだ宮廷を中心に育まれていた音楽

趣味が、今や全ヨーロッパに印刷楽譜の需要を見込めるほど階層の壁を越えた広がりを見せるようになっていた。同時代のイタリアやフランスの楽譜印刷業が宮廷文化の周辺に繁栄したとすれば、アントウェルペンのそれはフラマン語の歌曲集や民衆的舞曲集など地元の音楽趣味にも配慮しつつ、国際商業都市のネットワークを生かして、フランス語圏の宮廷趣味やヨーロッパ中の富裕商人たちの嗜好と要請に応える歌曲集、そして国境をもたない宗教曲集の印刷楽譜を大量に輸出し広めることを目指した。

5. スザートの履歴

スザートその人の履歴もまた、このようなアントウェルペンの履歴と重なり、交錯している。ラインラントのおそらくはゼースト Soest (ケルン近郊) の生れとされる彼が記録に登場するのは1529年のことで、アントウェルペンの〈我等が愛する聖母を讃える兄弟団〉Onze Lieve Vrouw Lofに「書記兼写譜係」として記載されている。この兄弟団は都市の中心に位置する聖母教会の信徒会で、ミサや聖務日課、日々のSalve regina (聖母讃歌、「讃えよ、女王」)などの音楽礼拝を請け負っていた。²⁷⁾15世紀後半から諸都市の信徒会では富裕層が主導的立場にあったが、これらの人々の音楽趣味は宗教音楽に止まらず、世俗音楽に関してもエリート音楽団体を発展させていた。そしてスザートはその後もなくアントウェルペンを代表する音楽団体〈都市の楽師たち〉stadsspeelliedenに迎え入れられることになる。これはこの都市の盛大な祭典・式典や宗教行列、あるいはもっと日常的なミサなどの宗教儀式のために市民たち自身で作る楽団で、ここで用いられる楽器はトロンボーン、トランペット、フルート、リコーダなど彼が得意とした吹奏楽器だった。スザートはつまり、都市権力がその繁栄を誇示するために華やかさを演出する公的催しに参加し、その音楽的才能によって頭角を現したのである。このような催しにおけるアントウェルペン市民の音楽的力量については、ドイツの画家デューラーのネーデルラント旅日誌²⁸⁾や前述したグイッチャルディーニの著作などに多くの証言がある。実際、16世紀のこの都市は全ヨーロッパに優れた演奏家と楽器を提供していただけでなく、すでに愛好家のための音楽教育システムが開発され、個人教授も盛んだった。²⁹⁾

スザートがなぜアントウェルペンにやって来たのかを知る具体的な資料はないが、彼がこの都市で最初に就いた職業はある程度までその意図を窺わせる。「写譜係」はもちろん音楽の素養を必要とするが、その後の〈都市の楽師〉と

しての演奏活動(スザートは晩年になってスエーデン宮廷でプロの演奏家としても活動している)から見ても、彼がこの時点で音楽の基礎教育を受けていたことはほぼ間違いない。³⁰⁾したがって彼はこの都市から、おそらく他のどの都市にも増して自身の才能を開花させるチャンスを期待することができた。さらに彼が「書記」を務めうるような識字教育も受けていたことは注目に値する。というのも当時の「書記」という職業は、しばしば中産市民階級の野心と結びつき、近世以降のとりわけ北ヨーロッパ社会でこれまでの聖職者知識人とは異なる新しいタイプの知識人、つまり世俗的知識人として商人階級とともに都市エリート層に成り上がる可能性を提供したからである。³¹⁾アントウェルペンは16世紀前半まで多くの外国人を吸収していたが、移動し往復する商人たちだけでなく、この都市に仕事を求めて流入する人々も少なくなかった。この方面では15世紀からとりわけドイツ人(主としてハンザ諸都市とライン川沿いの地域の出身者)が目立つようになり、16世紀には多くの南ドイツ人も加わって、この都市とドイツとの経済的な絆を強めた。この都市でのドイツ人の居住条件は安定したもので、単に生活するためだけならば市民権は特に必要なかったが、職人ギルドの親方になったり、あるいはこの都市で名士として暮らしたりするには一般にそれを取捨する場合が多かった。³²⁾スザートもおそらくこのような野心をもって若い頃にアントウェルペンにやって来たのだろう。彼はこの都市の市民生活に重要な位置を占めていた音楽の才能によって順調な人生のスタートを切り、楽譜印刷に携わる以前に上述した兄弟団(信徒会)の団長の妹と結婚している。名士の家族との縁組は、彼がこの都市の市民として完全な同化を果たし、新しい事業を始める上で大いに役立ったに違いない。

ところがスザートの人生は、楽譜印刷の創業からわずか数年で不安定要因を抱え込むことになった。それはちょうど、ルター派の異端書の印刷・輸出で好況を呈したこの都市にカルヴァン派の教義が伝わる時期と重なっている。記録によれば、彼は1546年に市当局に正統キリスト教への信仰を誓っており、信仰をめぐる何らかの嫌疑がかけられたように見える。しかし他の印刷業者たちもこの時期に同様の宣誓をしており、この事件がその後の活動に大きな影響を及ぼした形跡はない。しかしその3年後の1549年、アントウェルペンで皇帝カール五世とその息子(後のスペイン王フェリペ二世)の盛大な入場式³³⁾が催された折に、スザートは何人かの楽師たちと共に「不適切な振舞い」を咎められて〈都市の楽師たち〉を解任された。彼らの行為がカトリックを堅持する皇帝一族に

対する改革派の意思表示であったかどうかは分からないが、後の履歴から見てその可能性は十分にあっただろう。この出来事はしばらくの間、彼の楽譜印刷業にも深刻な影響を及ぼした。直後には小さなシャンソン集の印刷特権を得るためだけに、ネーデルラント総督ハンガリーのマリアへの取りなしを、彼女の信任を得ていた音楽家ベネディクトゥス・アッペンツェラーに依頼している。マリアはスザートがその工房で印刷した最初の楽譜の献呈者であり、この地方の統治者として、彼の事業の発展のためにも決して機嫌を損ねてはならない相手だった。しかしその後は再び関係が改善されたのか、この時の汚点がすぐさま工房の衰退につながったわけではない。というのも、その2年後の1551年に彼はこれまで旧市街の両替所近くにあった工房を新市街に立てた立派な建物に移し、そこで多声部に編曲したネーデルラントの世俗歌曲集『音楽の本』*Musyck Boexken* 第1～2集と、器楽によるネーデルラント舞曲集である第3集 *Danserye*（今日まで作曲・編曲家スザートの名前が一般に記憶されているのはこの舞曲集に拠るところが大きい）を出版しているからである。スザートの楽譜印刷が成功を取めたのを見るや、この事業に参入し競合する者も現れはじめたが、時代の好尚と商機に敏感だった彼は、売れそうな曲集と出版のTPOをよく弁えていた。³⁴⁾

スザートのここまでの履歴が示す瑕疵は、宗教改革運動の嵐が吹き荒れた16世紀の都市民にとっておそらくそれほど珍しいものではない。この国際都市の多くの富裕な、あるいは身分の高いアマチュア音楽愛好家（外国人も含む）と親交を結んだ彼にとって、事業拡大のチャンスはもちろん、窮地から脱するための手段も欠けてはいなかっただろう。しかし、印刷業者の扱う商品は異端思想を広範に流布しうる危険な媒体^{メディア}として、神聖ローマ帝国政府がまっさきに目を光らせた対象であり、その圧力がかければ商業利益を優先するアントウェルペン市当局もそのつど厳しい取り締まり姿勢を示す必要に迫られた。そして1540年頃まではまだある程度^{ポーズ}姿勢であった印刷業者への監視・抑圧は、これ以降少しずつ厳しさを増していったように見える。というのも、50年代のスザートは投機的な土地購入や宝くじの当選によって財産を殖やす一方で、印刷工房の出版方針を大きく転換し、それまで当たりをとった数多くのシャンソン歌曲集の印刷を極端に控えて、ミサ曲やモテット集、詩篇歌集など宗教音楽にはつきりと重心を移しているからである。

スザート工房の出版物を年代順に並べてみると³⁵⁾、この方針転換が如実に見てとれる。1552年の『シャンソンの華』*Fleur de chanson* 第5～6集以降、許可

を得て出版されたシャンソン集の版は 1555 年の 2 つの曲集、1558 年の 1 つの曲集にすぎず、同年久しぶりに大量に印刷した第 3 版『シャンソン集』第 1～10 集、第 2 版『シャンソン集』第 11 集は出版地・出版年を付さずに出している。そしてフラマン語歌集シリーズとして本来は世俗歌を中心に企画されたはずの『音楽の本』も、第 1～2 集（第 3 集は器楽曲集で歌詞は無い）の世俗歌集に続く第 4～11 集はすべて詩篇歌集 *Souterliedekens*（つまり宗教曲集）に限っている。しかも、最後の第 8～11 集はアントウェルペンではなく、1558 年に彼が移り住んだ北ホラント州の都市アルクマール（この干拓地を彼は 1553 年におそらくは投機目的で購入している）で 1561 年に出版されているのである。カルヴァン派に寛容であったこの都市への移住には、既に指摘されているようにスザート自身の信仰問題が絡んでいたであろう。その後、彼は印刷業を廃業してこの土地の上級役人となったが、1567 年には以前から同地に合流してカルヴァン派の活動を行っていた義理の息子（娘クララの夫でドイツ人）とともに財産を没収されるという悲運に見舞われた。アルバ公がスペイン軍を率いてネーデルラントに入り残酷な異端審問を開始したのはこの年であり、この事件も同じ文脈で考えるべきだろう。以降しばらくの間、彼の人生はスエーデン（スエーデン国王はすでに 16 世紀前半からルター派に改宗していた）の外交官であったこの義理の息子に翻弄されたようだが、現存する最後の記録によれば、1570 年にはストックホルムに住み書記を務めていたという。³⁶⁾

6. 〈歌の本〉と異端弾圧

スザートに対する異端の嫌疑についてはこれ以上のことは知られていない。しかしスザートが世紀半ばまで大いに成功を収めた数多くの世俗歌集を捨て、後には主として宗教曲集を出版するようになったこと、そして商機に臨んで敢えて世俗歌集を印刷する場合には、正式の許可を得ない隠れた版であったことなどを考え合わせるならば、この方針転換はやはり異端の嫌疑を避けようとする意図と関わっていた可能性が高い。いったい楽譜印刷業者が印刷物そのものによって異端の嫌疑を受けることなどあり得たのだろうか。

スザートの印刷工房が富裕・中産市民層を主たる購買層として、当初は多声部の、そしてしばしば伴奏付きのフランス語世俗歌曲集（シャンソン集）に焦点を当てる経営方針を採ったとすれば、ルーランスの歌集のような同時代の大衆向けの〈歌の本〉はもっぱら単旋律で、楽譜をまったく付していなかった。当

時の様々の記録や図像から、これらの民衆歌はしばしば居酒屋や路上、広場などで集まって歌われたことが分かるが、そこでは斉唱が一般的であり、パートに分かれて歌われた形跡はない。スザートが1542～3年に多声部の楽譜の印刷を始めてから数年後には、このような単旋律の世俗歌集も次第に楽譜付きで出回るようになり、周辺諸都市にも広まっている。

楽譜のないルーランスの歌集の場合、現在までの研究でそのメロディーが同定されている歌には、大きく分けて二種類ある。一つは、「肉の罪に満ちた」世俗歌を非難する声が高まったこの時代にアントウェルペンで出版された楽譜付きの宗教歌集（賛美歌集）『敬虔かつ有益な本』*Devoot ende profitelijck boecxken* (1539) と『詩篇歌集』*Souterliedekens* (1540) にそのメロディーが見出せる場合である。前者の賛美歌集の場合、後に世俗歌に転用されたメロディーも存在するが、フラマン語訳の聖書「詩篇」に曲を付けた『詩篇歌集』の方は、当時の歌好きの若者たちを教化する目的で親しみやすい世俗歌のメロディーを積極的に借用していた。ここにはさらに、楽譜が読めない歌い手用に「〇〇のメロディーで」と世俗歌のタイトルが指示されており、楽譜が残されていない世俗歌のメロディーを知るための貴重な資料となっている。³⁷⁾そしてもう一つは後世の楽譜付き世俗歌集に同じ歌あるいはその異曲とおぼしき歌や替え歌が見出せる場合であるが、一つの歌に複数のメロディーが存在する例もかなりあり、特定は難しい。このように当時の歌のメロディーは宗教歌にも世俗歌にも共有され、一つの歌が複数のメロディーをもっていたり、逆に一つのメロディーに複数の歌（歌詞）が付けられたりする現象がしばしば見られた。したがって〈歌の本〉は、その内容（言葉）が冒瀆的である場合だけでなく、聖なる宗教歌のメロディーが淫らな世俗歌に転用されたり、逆にまた聖なる歌詞に淫らな世俗歌のメロディーが指示されたりする場合にも危険なもの、つまり異端と見なされた。とりわけ一枚刷りの簡易印刷物として大量に出回った歌のなかには、はっきりと対立宗派を嘲笑し愚弄する目的のものもあったからである。

1544年に出たルーランスの『美しい歌の本』は、1546年に市当局が作成した禁書目録にリストアップされた。上述したように、禁書目録の作成はネーデルラントが一番早く1529年のことだったが、禁じられた内容は異端宗派（改革派）の教義やカトリック批判だけでなく、不道德や性的放縦、政治的偏向・過激思想などかなり広い範囲にわたっていた。楽譜もメロディーの指示もないルーランスの歌集の場合、禁書の理由は明らかに歌詞そのものにあった。実際、173

の歌を収めたこの歌集の原本が210歌、そして221歌へと二回の増補を経たとき、付加されたのは主として性的な歌と時事的（政治批判や当時の一枚刷り印刷物でもしばしば出回った聖職者批判など）な歌だったのである。この種の歌が販売促進につながると踏んだルーランスの編集方針は、当時の人々に周知の寓意を用いてこの歌集の扉絵（図版1を参照）にも暗示されている。ブルゴーニュ風のいささか古めかしい毛織り衣装（ここから、この木版図は古い版を再利用あるいは盗用したと考えることができるだろう）をまとった若い男女が左手を握り合い、男性のほうがカーネーション（花言葉は「愛情」）らしき花を差し出している。右手奥に描かれた植木もまたこの時代の寓意図像にしばしば見られるように「愛を育てる」という意味をもつ。つまり、この歌集には多くの恋の歌が含まれているが、そこで歌われる恋は左手で結ばれた関係、すなわち右手で結ばれる結婚とは異なる疚しく不道德な関係であると告げているのである。この歌集が禁書目録に加えられたという事実がそのまま彼の販売戦略の正しさを証明するわけではないが、この歌集の海賊版が周辺諸都市に数多く出回り、あるいは編集し直されて後々まで版を重ねたのを見れば、当時流行した世俗歌の傾向がある程度まで窺える。印刷業者たちは次第に厳しさを増していく検閲に対し、問題となる歌を削除したり、歌詞を手直ししたり、あるいは当たり障りのない歌に差し替えることで切り抜けようとした。その結果、〈歌の本〉は次第に時代を反映する鏡としての役割を失って画一化し、ある意味洗練されることにもなったが、17世紀に至っても世俗歌集の需要は極めて大きく、印刷業者にとって常に魅力的な収入源だった。

ところで、アントウェルペン市が1546年に禁書目録を作成したのは、この都市の商人階級が宗教改革派と結んで不穏な動きを見せたことがきっかけだった。³⁸⁾ 背景には、この前年に宗教改革に対抗するトリエント公会議が召集され、危機感を強めたカトリック側の内部改革が始まったという事情もあっただろう。しかしネーデルラント地方は一般にプロテスタント教義の浸透が遅く、16世紀前半のルター派教義の流入も、アントウェルペンに住むドイツ人（社会）の問題とはなりえても、この都市の一般市民の信仰問題として重要な意味をもっていたわけではない。また、後にネーデルラント全体に急速に広がることになるカルヴァン派の組織化も、1540年代末からである。³⁹⁾したがって、この先駆的な異端事件に対して当局が講じた収拾策も、市民の信仰問題全般を規制するのではなく、異端書物の印刷・流布を阻止することに向けられている。この段

階でルーランズの歌集がリストアップされたのは、対抗改革的な風紀肅正の流れを受けた周地的な事件にすぎなかつただろう。1542年と1545年に死刑となった二人のルター派印刷業者（第3節参照）の例が示すように、度重なる深刻な違反を犯さない限り、命を危険に曝すまでには至らなかつた。ルーランズもまた、そのつどの検閲をくぐり抜けながら虎の子の歌集出版を続けたと思われる。

しかし、宗教改革派をめぐって監視が強まったまさしくこの1546年にスザートが個人として正統キリスト教（カトリック）への信仰を誓わなければならなかつたという事実、そしてその後の皇帝に対する不敬事件は、おそらくルーランズに咎められた風紀紊乱・不道德の罪とは異なる意味をもっていただろう。というのも、彼はアントウェルペン市民として見事に同化を果たしてはいたものの、この都市で大きな存在感を示していたドイツ人社会とのつながりをずっと維持し続けていたからである。彼が親交を結んだこの都市の外国人音楽愛好家のなかには南ドイツ人有力者が何人かおり、彼が作曲したモテットはスザート楽譜印刷工房が開設される以前からアウクスブルクやニュルンベルク（両都市は16世紀初頭から世俗・宗教歌集とその楽譜の印刷・出版が盛んだった）など南ドイツ諸都市で印刷されていた。⁴⁰後に彼の娘がカルヴァン派のドイツ人と結婚することになるのも、このようなドイツ人社会との緊密な関係を暗示している。

アントウェルペン市当局の商業中心政策はドイツ人社会内での改革派の信仰に寛容な態度を示していた。したがってそこには一種治外法権的なテリトリーが形成されていたと言ってよい。ハンザ諸都市、ライン河畔諸都市、そして南ドイツ諸都市出身のドイツ人たち、あるいは自分の都市との間を往復するドイツ商人たちは、1517年以降、ドイツ各地の宗教改革運動の展開を様々に反映し、ルター派に改宗した者も少なくなかつた。とりわけ南ドイツのフッガー家やヴェルザー家の経済活動を通じて流れ込んだ大量の銅と銀は、この都市の国際的取引に不可欠の要素であり、両家は皇帝カール五世の資金調達にも大きく寄与していたから、このルートを通じて侵入する改革派の思想を排除することは事実上困難だった。さらにここにはブラバントに近いライン河畔諸都市を経由してスイスのツヴィングリ派や再洗礼派、そしてジュネーヴのカルヴァン派（一時ジュネーヴを追われたカルヴァンは1538年から1541年までシュトラースブルクに滞在した）などの教義が伝わり、カルヴァン派信仰を告白する北ドイツのハンザ商人も存在したという。この時点でスザートもまたこの宗派に与していたとする決定的な資料はないが、宗教改革派という大きな枠組みで見ると、こ

の都市の中産市民層とドイツ人社会とをつなぐ人物としてスザートは微妙な位置に立っていたに違いない。⁴¹⁾皇帝とスペイン王に対する不敬事件はカルヴァン派がブラバント地方で組織化され始めるまさしくその時期に起きていること、彼が印刷業者および楽師として、都市の祝祭文化を主導した〈^{レーデライカー}修辞家団体〉(後述第7節参照)の一員、あるいはこの団体と緊密な関係をもっていたと思われることなども、スザートがアントウェルペンにおいてカルヴァン派の伝達者あるいは仲介者に近い役割を演じた可能性を推測する有力な根拠となりうるのではないか。

以上のことから判断するならば、スザートが50年代から世俗歌集の楽譜印刷を自粛するようになったのは、二度の事件で注意人物となった自身への市当局の嫌疑をかわし、無益な軋轢を避けるためだったとひとまずは考えてよい。しかし、この自粛の直接的なきっかけが彼の印刷楽譜そのものにあった可能性もないわけではない。ヨーロッパの音楽愛好家たちに広く歓迎されたスザートの数多くのフランス語シャンソン集は、アテニヤンのものと同様粗野で新奇な内容も含まれてはいたが、そこには地域や国境を越えた汎ヨーロッパ規格と言えるある種の洗練が自ずと備わっていた。ネーデルラント総督ハンガリーのマリアが用いた言語も皇帝カール五世が用いた言語も主としてフランス語であり、宮廷の庇護者たちを意識してその趣味を明らかに損なう要素は除かれていたからである。しかし、スザートが1551年に出版したフラマン語の世俗歌集『音楽の本』第1~2集には、ルーランスの歌集を特徴づける性的な歌もかなり含まれており(この歌集と共通する歌が5曲あるが、そのすべてが性的なものではない)、中世のファブリオを思わせる露骨な性的当てこすり、娼婦や娼館の暗示など、風俗紊乱を咎められそうな要素も存在する。これらの世俗歌が四声部の楽譜として印刷され、都市門閥や中産市民層の家庭音楽 *Tafelmuziek* として歌われたという事実は、近代以降の心性にとって奇異なものに思えるが、少なくともこの世紀の初頭からヨーロッパ各地に出回っていた民衆的な世俗歌には同様の内容の歌が数多く存在した。そしてこのような「恋の歌や肉の罪に満ちた歌」を非難し宗教心を育てる賛美歌を若者たちの間に広めようという声は、まず宗教改革派の側から起きたのである。⁴²⁾

スザートが『音楽の本』第1集に付した前書きは、フラマン語歌曲集に対する彼の熱意が当時の世俗歌の実態と大きく乖離するものであったことを示している。彼はそれまで様々なタイプの楽譜、とりわけ多くのフランス語シャンソ

ン集を印刷してきたが、常に「音楽という高貴な天上の芸術をわがネーデルラントの母語によっても照らし出したいと考えてきた。」しかし、誠実に力を尽くして蒐集作業に当たったにもかかわらず、すでにあらゆる国に広まり受け入れられているラテン語、フランス語、イタリア語の歌のような、洗練された上品な人々にふさわしいフラマン語の歌を数多く探し出すことはできなかった。それゆえそのような歌を知っている人、作った人は是非自分に教えてほしい、これから一緒にわが祖国の音楽のために尽力し、フラマン語の歌を「その芸術においても甘美さにおいても他の歌に劣らぬ」ものに、「世に広く知らしめあらゆる人々がどこでも歌える」ものに、そして「神にも薦められる」ものにしようではないか、とスザートはこの前書きを結んでいる。⁴³⁾

したがって、フラマン語歌集『音楽の本』が第4集以降は詩篇歌（宗教歌）のみを収めるようになった理由を、スザートの望みに叶う洗練された世俗歌が少なく、また宗教歌集が「安全でよく売れる」（傍点筆者）ことに求めることはある程度まで可能だろう。⁴⁴⁾しかし、もしそれだけの理由だとするならば、彼がなぜ『音楽の本』第1～2集以降、多くの売上を期待できたはずのより上品なフランス語シャンソン集の印刷まで控えて、商機に応じて秘密裡に印刷するに止めたのか、つまり、なぜ工房の表向きの活動を宗教歌集の印刷に見せかけたのか、説明がつかない。ルーランスの歌集と同様の性的な歌が含まれていた⁴⁵⁾とはいえ、スザートのフラマン語世俗歌集は禁書目録にリストアップされることはなかった。問題はむしろ前書きのほうにあったのではないか。ここに示された「わがネーデルラントの母語」と「わが祖国」に対する熱い感情の吐露には、宗教改革派が聖書の俗語（自国語）翻訳に示した情熱と通底するプロテスタント的俗語イデオロギーが聞き取れるのではないか。⁴⁶⁾

ルターのドイツ語訳聖書は、それまではラテン語を知る聖職者知識人のみの特権的に読むことができた聖書を一般民衆のものとした。上述したように、アントウェルペンはルター訳聖書やルター派異端書などの印刷で知られたが、カトリックを批判しつつその内にとどまったジャック・ルフェーブル・デターブルが翻訳したフランス語訳旧約聖書（1530年、新約は1523年にパリで刊行している）が印刷されたのもこの都市だった。イギリスでもちょうど同じ頃に聖書の英訳が始まっている。フラマン語（オランダ語）訳聖書の成立はもっと遅く17世紀を待たなければならぬが、16世紀の俗語イデオロギーは宗教改革派の教義とともにネーデルラントにも流れ込んでいただろう。つまりスザートの前書

きは、これまで宮廷風音楽趣味に憧れてフランス語のシャンソンを楽しんできたフラマン語を母語とする富裕市民層に向って、このフランス語中心主義に対する反省を促すものでもありえた。フラマン語の世俗歌はまだ粗野で未熟である、しかしそれを洗練しその成熟を促してフランス語やラテン語と対等のものとしなければならない、そのために一緒に力を合せて神にも喜ばれるものを作ろうではないかという論理の背後に、フラマン語圏ネーデルラントの人々にカトリック／ラテン語（古典語でもあるが、宗教曲においてはカトリックを暗示するとも解釈できる）・フランス語／ハプスブルク家の支配からの離脱を暗に勧める意図が隠されていた可能性は否定できない。この前書きは、2年前の皇帝一族に対する不敬事件と同じ精神、同じ文脈で記されたのではなかったろうか。ドイツ出身のアントウェルペン市民として同市のドイツ人社会と緊密なつながりを維持していたスザートが、宗教改革運動と結びついた俗語イデオロギーに共感しそれを我がものとする機会は十分にあった。そうだとすれば、この歌集はその多義的な前書きの隠された意図によって、市当局の密かな、しかしますます大きな疑惑を生み、スザートはこれ以降相当に慎重な振舞いを迫られることになったのではないか。

7. カルヴァン派印刷業者のその後の運命

アントウェルペン市当局は、1546年の異端対策を通じてこの都市に住む二人の印刷業者ルーランスとスザートの履歴に一つの接点をもたらした。1551年にスザートがフラマン語の世俗歌集を印刷したとき、彼はルーランスの『美しい歌の本』に含まれるいくつかの歌を選んだ。それらは当時出回っていた他の歌集にも収められていたかもしれないが、スザートが収集し参照した歌集のなかにルーランスの歌集は必ず含まれていただろう。それから何年か後の1558年になると、今や市内ではっきりと不穏な動きを示しはじめたカルヴァン派に対し、アントウェルペン市当局は厳しい態度で臨む方針を打ち出した。そしてこれ以降、改革派に帰依していたように見える彼ら二人に苦い人生を歩ませることになったのである。

ネーデルラントはこの2年前（1556年）にカール五世が退位し、その息子のスペイン王フェリペ二世（スペイン・ハプスブルク家）の支配下に入っていた。カトリックの盟主として政治的手腕を発揮し、宗教心溢れるスペイン的熱血漢であったと言われるこの王は、早速ネーデルラントにおける異端審問を強化し

た。彼は父親のカール五世と叔父のドイツ王フェルナンド一世（オーストリア・ハプスブルク家）が表向きはカトリック堅持を唱えつつ、アウクスブルクの和議（1555年）で改革派と取引したこと、すなわちドイツの諸都市と諸侯にルター派信仰を認めた（カルヴァン派は認められなかった）ことを内心苦々しく思っていたに違いない。1558年1月に〈^{レーデライカー}修辞家団体〉の団員として知られた小印刷業者フランス・フラートが、異端出版物流布という軽い罪状で死刑に処せられた⁴⁷⁾のは、この政治情勢の変化を如実に物語るものだった。アントウェルペンの印刷業者に対するこれまでの異端嫌疑は、何度も違反が繰り返されない限り寛容に処分されるのが常だったから、フラートの処刑には異端弾圧の強化を印象づけて自粛を促そうとする市当局の見せしめ的な意図が潜んでいただろう。そして何よりも、当時カルヴァン主義の温床となりつつあった〈^{レーデライカー}修辞家団体〉に対し厳しく警告し牽制する意図が込められていたに違いない。

16世紀のネーデルラント文化について語ろうとすれば、〈^{レーデライカー}修辞家団体〉の存在に言及しないわけにはいかない。この団体はフラマン語圏ネーデルラント諸都市に14世紀末に成立した画家やその関連業種の職人たちの作る中世的広場文化・祝祭文化の実践団体で、それまで市当局と協力して様々の祭典・祝典の企画・演出および実施を請け負ってきた。⁴⁸⁾その団員たちの間に今や急速にカルヴァン派に帰依する者が増えはじめたのである。アントウェルペンの〈^{レーデライカー}修辞家団体〉は古い歴史を持ち、16世紀には三つの団体を抱えてその活動も活発だったから、元々積極的な異端弾圧には気が進まなかった市当局にとって極めて遺憾な状況が生じた。小印刷業者のフラートが〈^{レーデライカー}修辞家団体〉の一員だったのはおそらく、この団員たちの多くが所属していた同業組合、聖ルーカスギルド（一般に「画家組合」と訳される）が1536年から印刷業者（関連の印刷物取扱い業者・書店主なども含む）の加入をも認めるようになっていたからである。市当局はこの事件後、すべての印刷業者に聖ルーカスギルドへの加入を義務づけ⁴⁹⁾、これによって匿名・偽名などによる不審な印刷物を徹底的に取り締まる作戦に出た。

ちょうどこの年にスザートは息子のヤーコブを工房の印刷人にした。上述したように、彼が第3版『シャンソン曲集』の第1集から第11集までを隠れて一挙に印刷したのはこの年である。その3年後、1561年に工房を息子に譲り渡してアントウェルペンを引き払った彼は、このような一連の出来事によってこの都市でカルヴァン派信仰を堅持することの困難をはっきりと認識していただろ

う。スザートに対する異端の嫌疑は、息子が工房をそのまま引き継いでいることから見ても、楽譜印刷そのものに関わっていたわけではない。この地域がスペイン王の支配下に入った以上、一時はうまく切り抜けたかに見えた 1549 年の不敬事件がいつまた蒸し返されるか分からなかった。彼はたび重なる嫌疑から注意人物として市当局の監視を免れ得ない境遇に陥っていたに違いない。

そして 1559 年、つまり市当局が印刷業者を厳しく取り締まる条例を発した翌年に、おそらくはこの新しい法律に強いられて、ルーランスの名が聖ルーカスギルドの加入者台帳に印刷物販売業 *meester-librariër* として記載されることになる。この時期になっての加入は、印刷業者としての彼の来歴に潜む後ろ暗さを仄めかすものでもあったろう。ルーランスの場合、そのカルヴァン派信仰のどこまでが信念の問題であり、どこからが生活の問題であったのかは判然としない。ともかく彼は、この記録から 10 年後に異端書を印刷した罪で市当局に追われ、尋問ののち刑を言い渡されてその 10 ヶ月後に獄中で死んだ。

〈結び〉

スザートの印刷した楽譜はそのほとんどが何らかの形で（全声部ではなくとも一声部のパート楽譜として）450 年後の今日まで残されており、したがって彼の楽譜印刷業者としての履歴もほぼ完全に辿ることができる。16 世紀後半の印刷・出版史を席捲した観のあるプランタンの場合にはなおさらで、1555 年の工房開設から死を迎える 1589 年までの間に、彼の指揮下で印刷された膨大な出版物の数は今日ほぼ確定されている（ライデンの工房で印刷したものも含めると、書籍は約 2000 点、一枚刷り印刷物を加えると 2500 点に上る）。その理由は、それらの多くが記録に書き留められ、また現物も大切に保存されてきたからであり、このように安定した保存環境が維持されていたのは、中・上層の購買層向けの書物が一般に、絵画などと同様財産目録に記載され遺産相続や競売の対象とされたからである。この時期の印刷物はまた、装飾された写本や写譜などと同様に、富裕層の好事家の蒐集対象でもあった。

因みに、スザートから工房を譲られた息子のヤーコブがそのわずか 3 年後にたった一冊のシャンソン集を出版しただけで世を去ったとき、この工房が使用していた活字やその他の器材を買い取って楽譜印刷にも事業を広げたのはプランタンその人だった。活字の一部はすでに死の直前にヤーコブ自身によってプランタンに売り渡されており⁵⁰⁾、この行為はアントウェルペンの楽譜印刷を代

表するスザート工房の技術的遺産が以降プランタンに委譲されることを公的に認める象徴的な意味を持っていたのではないかと思われる。というのも、16世紀人文主義のエリート印刷業者たちは活字と印刷人刻印プリンターズマークによってそれぞれの工房のオリジナリティとブランド性を誇り、その印刷物は一般に活字によって出自を識別することができた。プランタンがスザート工房の活動中は楽譜印刷に手を出そうとしなかったのは、単に競合を避けようとする彼の経営的才覚の問題ではなく、自身も高名な印刷業者としてスザート工房のブランド性を尊重したからではなかったろうか。

これに比してルーランスのような小印刷業者の場合、工房のブランド性とは無縁なだけに、儲け本位のその場主義が経営の基本戦術だっただろう。彼には印刷業を廃業して他の都市に移り住む、あるいは工房をもっと安全な都市に移すための資産の蓄積もなかったろうし、1569年に異端書印刷を咎められて一時的にアントウェルペンを離れたとしても、生きていくためにはまた印刷機械のあるこの都市に舞い戻ってこざるを得なかった。様々なお歴々と親交を結んでいたスザートが去った後の親族（息子夫婦）とは異なり、ルーランスの妻は彼の死後市外追放になっている。その生涯に印刷したものについても目録が作成できるような記録はほとんどないが、宗教書が主な印刷領域の一つであった彼にとって、ネーデルラント諸都市にカルヴァン派が急速に増えていったまさしくこの時期に、この宗派の出版物、すなわち異端書を印刷することは、必然の選択だっただろう。1566年にアントウェルペンから始まったカルヴァン派による偶像破壊運動は周辺諸都市に野火のように燃え広がり、1568年には重税と弾圧を加えるスペインからの独立戦争が起きた。この緊迫した時代背景を考えると、彼のような追放や獄中死は多くの市民が辿った運命だったかもしれない。そして1576年と1585年の二度にわたるスペイン軍のアントウェルペン占領は、この都市のインフラに壊滅的な打撃を与え、ヨーロッパの商業・金融の中心は完全に北ホラント州のアムステルダムに移ることになった。

16世紀北ヨーロッパに大量に印刷された民衆的な（単旋律の斉唱を旨とする）〈歌の本〉は、ルーランスの『美しい歌の本』のように一応は中産層をめざしたものであっても、後世に完全な形で残ることは稀だった。フラマン語の世俗歌はすでに16世紀前半からフランクフルト、ニュルンベルク、アウクスブルクなどのドイツ語圏でも多声部の印刷楽譜として出回っていたが、フランクフルトの有名な印刷業者クリスティアン・エーゲノルフのパート楽譜のようにフラ

マン語の歌だけを収めた曲集（36曲を収録し1536年以降に印刷されたと見られている）は稀で、シャンソン集やモテット集などにいくつか差しはさまれて流布するのが常だった。⁵¹⁾フラマン語だけの歌曲集がドイツ人の音楽の楽しみをとくに刺激したとは思われない。したがってフランクフルトの歌集は、当時からすでに有名だったこの都市のブック・フェア⁵²⁾を訪れるネーデルラント商人向けに印刷された可能性が高い。ネーデルラントにおける楽譜印刷はスザートが1543年に工房を開く以前には大規模には行われていなかったから、音楽愛好家が多いことでよく知られたこの地方向けにフラマン語歌集の楽譜を印刷することは悪い思いつきではなかったろう。そして、印刷楽譜によってメロディーが伝えられた場合には、フラマン語の歌がドイツ人のレパートリーになることもあった。南ドイツを中心に回った印刷楽譜を通じてフラマン語のいくつかの歌がこの地域で知られるようになったのはこのような事情からである。これに対し、土地のメロディーを知らなくては歌うことのできないルーランスの歌集が南ドイツの人々の手を経てやがては使い古される、ということはまずありえなかった。

しかし、ルーランスの『美しい歌の本』が保存されることになったヴォルフエンビュッテルは低地ドイツ語が話されるニーダーザクセンにあり、この地方はフラマン語（オランダ語）と非常に近い言語圏をなしていた。この近似性はフラマン語圏の人々にも意識されており、スザートの『音楽の本』第1集の前書きにも見えるように、16世紀の中ごろからはネーデルラント人自身が自分たちの言語を *Nederduits*（低地ドイツ語）と呼び慣らすようにさえなった⁵³⁾。そしてこの広い意味での低地ドイツ語圏とは取りも直さずハンザ同盟に加わった諸都市をおおう地域だった。前述したように、アントウェルペンは自身ハンザ都市の一つとして前世紀から北ドイツの同盟諸都市と緊密な関係にあり、おそらくはこの古くからの商業ルートを通じてルーランスの歌集はブラバント地方から近似した言語圏のニーダーザクセンにもたらされたのだろう。そしてここにもまた、アントウェルペンのドイツ人社会に存在したというカルヴァン派の商人が関わっていたかもしれない。16世紀のアントウェルペンの遠隔地貿易はその重心を南ドイツに移していたが、北ドイツのハンザ諸都市との間では取引額は比較にならないものの、相変わらず日用品や奢侈品など小規模で多様な商品の取引が盛んだった⁵⁴⁾。つまり、フラマン語の歌集はある程度その言葉を理解することができる異国の人々の間で珍重され、それを熱狂的に使用する人々が存

在しなかったがゆえに 19 世紀に発見されるまで図書館の片隅に生き残ることができたのではなかったろうか。

注

- 1) Hoffmann von Fallersleben (hrsg.), *Antwerpener Liederbuch vom Jahre 1544*. Nach dem einzigen noch vorhandenen Exemplare, Hannover, 1855.
- 2) 19 世紀末に出た『アントウェルペンの印刷・出版業者と書肆のプリンターズマーク』(G. van Havre, *Marques typographiques des imprimeurs et libraires anversois*, 1884)によれば、ヤン・ルーランス (Jan Roulans, ? - 1570) はアントウェルペンに近いブラバントの村ズンデルトで生まれ、1536 年 10 月 20 日にアントウェルペン市民となったとある (cf. Johannes Koeppe, *Untersuchungen über das Antwerpener Liederbuch von 1544*, 1927, S.38) が、最近公刊されたテキスト及びメロディーに関する詳細な注を施した版、*Het Antwerps Liedboek*, Teksteditie bezogd door Dieuwke E. van der Poel (eindredactie), Dirk Geirnaert, Hermina Joldersma en Johan Oosterman, *Reconstructie van de melodieën door Louis Peter Grijp*, 2004 (2dls.) の解説 (dl.2, p.27) では、ルーランスがアントウェルペン市民となったのは一年遅い 1537 年同月同日とされているので、こちらに従っておく。以下、ルーランスの履歴に関してはすべて同解説に拠る。
- 3) *ibid.*
- 4) Michael Limberger, 'No town in the world provides more advantages': economies of agglomeration and the golden age of Antwerp, in *Urban Achievement in Early Modern Europe, Golden Ages in Antwerp, Amsterdam and London*, ed. Patrick O'Brien, Cambridge UP, 2001, p.43, table 2.1 Population of Antwerp.
- 5) ロドヴィーコ・グイッチャルディーニ (Lodovico Guicciardini, 1521-1589) は著名な歴史家であり政治家でもあったフランチェスコ・グイッチャルディーニの甥。フィレンツェに生れ、アントウェルペンで死んだ彼は、長年暮した低地地方についての著作『全低地地方あるいは低地ドイツ地方について』*Di tutti i paese bassi, altrimenti detti germania inferiore* に貴重な同時代記録を残している。この書物は 1593 年に英訳され、17 世紀にはラテン語訳、フラマン語 (オランダ語) 訳などにも翻訳されて版を重ねた。
- 6) cf. John J. Murray, *Antwerp in the Age of Plantin and Brueghel*, p.4.
- 7) アントウェルペンの商業活動については、Limberger の前掲論文、Murray の前掲書、および Donald J. Harreld, *High Germans in the Low Countries: German Merchants and Commerce in Golden Age Antwerp*, Leiden·Boston, 2004 などを参照した。

- 8) Harreld, p.56, Map 1.
- 9) cf. Murray, p.23-24. 新取引所は16世紀のアントウェルペンの画家たちが繰り返し描いた市場シーンの風俗画にもしばしば登場している。この建物の上階の回廊（ギャラリー）は後に画家たちが絵画を展示即売するためにも用いられた。
- 10) Werner Waterschoot, Antwerp: books, publishing and cultural production before 1585, in *Urban Achievement in Early Modern Europe, Golden Ages in Antwerp, Amsterdam and London*, ed. Patrick O'Brien, Cambridge UP, 2001, p.234.
- 11) *ibid.*
- 12) L・フェーブル／H-J・マルタンによれば、イギリス向けの英語の書籍がアントウェルペンの成功の契機となったという。『書物の出現』下、関根素子他訳、ちくま学芸文庫、42頁。
- 13) 同業者たちはもちろんネーデルラントの他の都市でも活動していた。すでにアントウェルペンが巨大な国際市場を獲得していた16世紀半ばの記録によれば、大学町ルーヴァンの印刷業者は47名で、大学の需要に応じた学術出版が盛んだった。しかし前世紀のこの地方の中心地ブリュッヘでは19名、ヘントでは29名にすぎず、印刷物の内容も地域の行政文書が圧倒的に多い。cf. Leon Voet, *De typografische bedrijvigheid te Antwerpen in de 16de eeuw*, in *Antwerpen in de XVIde eeuw*, ed. Antwerpen, W. Couvreur, 1975, p.237. つまり、これらの都市の印刷業は都市権力と結びついてその需要を満たす範囲にとどまっており、その他の分野の書籍は宗教書であれ世俗書であれアントウェルペンにほぼ依存する形勢になっていたことが窺える。
- 14) cf. Waterschoot, p.233-235.
- 15) L・フェーブル／H-J・マルタン、前掲書、下、50-52頁のイギリスに関する記述、およびイギリスの印刷・書籍業者に関する法律については白田秀彰『コピーライトの史的展開』信山社出版、1998年、19-29頁を参照のこと。
- 16) Leon Voet, *Antwerp, the Golden Age: the Rise and Glory of the Metropolis in the Sixteenth Century*, Antwerp, 1973, pp.252-54. 因みに、16世紀半ばから台頭したリヨンの印刷業者もスペインへの書籍輸出に積極的だった。この世紀半ば以降、スペインは主としてアントウェルペンとリヨンの書籍市場となっている（リヨンの印刷業については、L・フェーブル／H-J・マルタンの前掲書第六章、及びナタリー・Z・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市—近世初期フランスの民衆文化』第I章を参照）。
- 17) cf. Waterschoot, pp.235-37. 当時大胆な改革派出版人として知られていた Nicolaes van Oldenborch は、アントウェルペンを中心とする七～八人の印刷業者が共有して用いた匿名だったという驚くべき例もある。
- 18) Waterschoot, pp.235-6.
- 19) アントウェルペンは16世紀半ば過ぎに経済的繁栄の頂点を極め、その後徐々に

下降線を辿り始めるが、この時代にプランタンが人文主義の金字塔として完成した多言語訳聖書 (Biblia polyglotta) もまた、その見込みは見事に外れたものの、スペイン王フェリペから経済的支援の約束を取りつけたからこそ開始したプロジェクトだった。古典学者モンタヌスと東洋学者ラフェレンギウスの協力を得て 1568 年に印刷に着手、1572 年に完成を見たが、販売に漕ぎつける前に経済的及び宗教的問題が次々と生じ多難な船出となった。cf. Murray, pp.79-80.

- 20) cf. Waterschoot, pp.234.
- 21) ティールマン・スザートの履歴に関しては Kristine K. Forney, *New Insights into the Career and Musical Contributions of Tielman Susato*, in *Tielman Susato and the Music of His Time: Print Culture, Compositional Technique and Instrumental Music in the Renaissance*, ed. Keth Polk, 2005/ *Tielman Susato, Musyck boexken*, books 1 and 2 : Dutch songs for four voices, ed. Timothy McTaggart, 1997, Introduction / *Die Musik in Geschichte und Gegenwart: Allgemeine Enzyklopädie der Musik begründet von Friedrich Blume*, 2. neubearbeitete Ausgabe, Ludwig Fischer (hrsg.), Artikel: Susato, 1. Tielman を参照した。
- 22) イアン・フェンロン「音楽と社会」今谷和徳訳、イアン・フェンロン編・今谷和徳監訳『花開く宮廷音楽』音楽之友社、1997年、所収、59-62頁参照。
- 23) リチャード・フリードマン「フランソワ1世治下のパリとフランス宮廷」秋岡陽訳、フェンロン編前掲書所収、214-16頁参照。
- 24) 16世紀初頭のフランスでは、宮廷音楽家による高度に洗練され技巧的なシャンソン・ミュージカル *chansons musicales* と大衆的な歌の旋律も取り入れた陽気で単純なシャンソン・リュスティク *chansons rustiques* の二つの系統が出会い、交流し、音楽の階級・社会混淆が生じた時代だった。cf. Daniel Hertz, *The Chanson in the Humanist Era*, in *Current Thought in Musicology*, 1976/ フリードマン、前掲論文、222-23頁。
- 25) ハンガリーのマリアはオーストリアのマリアとも呼ばれ、神聖ローマ皇帝カール五世の妹。祖父のマクシミリアン一世がブルゴーニュ公国唯一の後継者マリーと結婚した後マリーが亡くなったため、ハプスブルク家はネーデルラントを領有することになった。カール五世もマリアもフランス語圏のブリュッセルで生まれ育てられている。マリアはハンガリー王 (ボヘミア王を兼ねる) の妃となったが、王の死後再婚せず、1530年から1555年までネーデルラント総督を務めた。
- 26) cf. *Musik in Geschichte*, Artikel: Susato, 1. Tielman.
- 27) クリスティーン・K・フォーニー「16世紀のアントウェルペン」津上智実訳、フェンロン編前掲書所収、pp.417-418.
- 28) *Albrecht Dürers schriftlicher Nachlass*, Berlin, 1918², *Tagebuch der niederländischen Reise*, pp.40-42. 1520年夏にアントウェルペンを訪れたデューラーは、巨大な聖母教会の素晴らしく豪華な音楽ミサやあらゆる階級の市民が挙って参加する華麗な宗教

行事にひたすら感嘆の眼を向けている。

- 29) アントウェルペンにおける音楽の楽しみの普及と音楽生活については、cf. Guido Persoons, *Muziekleven*, in *Antwerpen in de XVIde eeuw*, Genootschap voor Antwerpse Geschiedenis (ed.), pp.499-509 およびフォーニー、前掲論文参照。
- 30) Forney はスザートをケルンの生まれ（ゼーストはケルン近郊）とする文書の存在と絡めて、彼の父親が 1508 年にケルンで催された秘蹟の日の行列の記録に言及されている盲目の楽師ではないかという。cf. Forney, p.2.
- 31) スザートはアントウェルペンから北ホラント州のアルクマールに移住してから当地の上級役人になっており、晩年のスエーデン宮廷でも書記を務めている。
- 32) Harreld, p.63.
- 33) 王侯の〈入場式〉は、王侯が支配下においた都市に歳入市などの税金免除と引き替えに戦時の財政援助を義務づける互惠的關係に基づいて 15 世紀から催されるようになり、この關係が都市の経済的發展に大きく寄与したため、王侯を迎える〈入場式〉は次第に都市の繁栄を誇示する華美を極めたものになった。1549 年のアントウェルペンの〈入場式〉はこの都市と關係をもつ様々の国からの資金援助を受けていたことによっても人々の記憶に鮮明な印象を残した。cf. Anne-Laure van Bruaene, “A wonderfull tryumfe, for the wynnyng of a pryse”: guilds, ritual, theater, and the urban network in the Southern Low Countries, ca. 1450-1650, in *Renaissance Quarterly*, June 2006, p.375.
- 34) Forney, p.10. スザートはパトロンや親交を結んでいた有力者たちの催す儀式や祭典に合わせて、数多くの購買者が見込める時期に出版している。
- 35) Forney, Table 1: Publications from Susato Press by Year, p.20.
- 36) cf. *Musik in Geschichte*.
- 37) cf. *Het Antwerps Liedboek*, vol.2, p.41. また、宗教歌と世俗歌相互のパロディ化については、K. Ph. Bernet Kempers, Die “Souterliedekens” des Jacobus Clemens non Papa, in *Tijdschrift der Vereeniging voor Noord-Nederlands Muziekgeschiedenis*, vol. 13, 1929, pp.29-43.
- 38) cf. *Het Antwerps Liedboek*, vol.2, p.33.
- 39) cf. Wiebe Bergsma, Church, state and people, in *A Miracle Mirrored: The Dutch Republic in European Perspective*, ed. Karel Davids and Jan Lucassen, 1995, p. 214.
- 40) cf. Forney, p.17. スザートと南ドイツ諸都市の著名な印刷業者との間に窺えるこのような緊密な關係から、Forney はスザートが楽譜印刷を学んだのもこの土地ではなかったかと推測している。南ドイツを中心とする楽譜印刷と〈歌の本〉については、cf. John L. Flood, Das Lied im Verlagsprogramm deutscher Drucker des 16. Jahrhunderts, in *Lied im deutschen Mittelalter*, hrsg. C. Edwards et.al., 1991. pp.335-50.

- 41) cf. Harreld, p.89. ドイツ商人は一般にルター派に帰依する者が多かったが、ハンザ商人の中にはカルヴァン派を信奉する者もいた。ネーデルラント総督マリアはアントウェルペンにスパイを送り込み、ドイツ人社会をも含めてこの町の異端信奉者（特にカルヴァン派）の動向を報告させていたという。
- 42) ルターは1524年に出した『ヴィッテンベルク賛美歌集』の〈序〉で当時の世俗歌を非難し、それに代るものとして宗教的な歌を広めようとするこの歌集の意図を明快に述べている。cf. Die Vorrede des Wittenberger Gesangbuches von 1524, in *D. Martin Luthers Werke, Kritische Gesamtausgabe* (Weimarer Ausgabe), vol. 35, pp. 474-475.
- 43) Tielman Susato, *Musyck boexken, Books 1 and 2: Dutch Songs Four Voices*, ed. Timothy McTaggart, 1997, Introduction, p.xi and note 24.
- 44) *ibid.*, p.xii.
- 45) *ibid.*, p.xiv and note 40. 『音楽の本』1-2集は合わせて53の世俗歌を収めており、ルーランスと同様ここでも圧倒的に恋の歌が多い。歌集中「性的」な要素を含む10の歌は軽くすぐりからはっきりと卑猥なものまで幅広いが、やはり全体としてルーランスより大人しいと言えるだろう。
- 46) 前書きにおける「わがネーデルラント」のような言葉はかつての研究でスザートの出自を誤解させる原因ともなったが、ドイツ人である彼がこのように語る背景に、単に宗教的とは言えない、少なくとも結果としては政治的な意図を読み取ることも可能である。宗教改革運動の俗語による展開が生み出した新しい思想、すなわち同じ言葉を語る人々の共同体としての領邦国家的祖国と宗教（宗派）とを結合するイデオロギーは、中世的なキリスト教ヨーロッパの統一的イメージに亀裂をもたらし国家間の溝を広げていった。宗教は近世から近代に向う領邦国家の形成にとって極めて政治的で求心的な役割を果たしたのである。また、ドイツではすでにゲオルク・フォルスター編集の楽譜付き世俗歌集 *Frische teutsche Liedlein*（第一集は1539年、二集1540年、三集1549年、四・五集1556年）が出て版を重ねていたことを、ドイツ人スザートはおそらく知っていただろう。というのも、この歌集もまた楽譜印刷で知られた、スザートと縁の深いニュルンベルクで出版されていたからである。そしてフォルスターもまた、宗派は異なるがプロテスタントを信奉し、ルターのために賛美歌の作曲を手掛ける一方で、祖国の言葉、「ドイツ語の」歌に思い入れた人物だった。
- 47) cf. Waterschoot, p.236.
- 48) 〈修辞家団体〉の祝祭時における広場的演劇活動については、ジョージ・R・カーノードル『ルネサンス劇場の誕生—演劇の図像学』佐藤正紀訳、晶文社、第二章、第三章に詳しい。彼らの活動の政治的側面に関しては、cf. Elizabeth Alice Honig, *Painting and the Market in Early Modern Antwerp*, Yale UP, 1998に様々な言及がある。

- 49) cf. Waterschoot, p.234.
- 50) cf. *Musik in Geschichte*.
- 51) cf. McTaggart, Introduction, p.ix-x.
- 52) フランクフルトのブック・フェアがヨーロッパ近世の印刷・出版業全体に持っていた意味については、cf. John L. Flood, ‘Omnium totius orbis emporiorum compendium’: the Frankfurt fair in the early modern period, in *Fairs, Markets and the Itinerant Book Trade*, ed. Robin Myers, Michael Harris and Giles Mandelbrote, 2007, pp.1-42.
- 53) cf. *Woordenboek der Nederlandsche Taal*, article: nederduitsch. スザートの前書きには、Het ierste mysyck boexken ... daer inne begrapen zyn ,, liedekens in onser nederduytscher talen ,, 「この我々の低地ドイツ語（フラマン語）の歌が収められている最初の音楽の本は……」と書かれている。ドイツ人の側でも早くから、ブラバント地方の言葉は低地ドイツ語との近似性が認識されていた。例えば、13世紀のナイトハルトのミンネザングにすでに、ブラバントからやってきた人物の言葉がニーダーザクセン訛りに似ており、南ドイツ人にはさっぱり分からないと嘲られている。cf. *Die Lieder Neidharts: der Textbestand der Pergament-Handschriften und die Melodien: Text und Übertragung*, ed. Siegfried Beyschlag, 1975, Wörterverzeichnis, article: vlaemen, Flaeminc, vlaemisch.
- 54) 16世紀アントウェルペンの対ドイツ貿易における取扱い品目の地方差と商人の規模については、Harreld, *High Germans*, chapter 4 (esp. p.78)で論じられている。